

第7次山形県教育振興計画検討委員会（第6回） 発言概要

（第7次山形県教育振興計画検討委員会 委員名簿順）

【池田委員】

- 多様性を尊重し、様々な人たちにきめ細かく対応していこうという意思を感じる。
- 子どもの減少による学校の統廃合は、学びの機会の確保の視点で考えていくべき。多様性、個性という中、例えば不登校の子が別の小規模な学校だと通えるようになる、学びの中身で学校を選択できるなど、学校を残すことには可能性があると思う。計画を策定、遂行する上で、学校のあり方も考える必要。
- 7教振は子どもたちを主語にしているので、「なんで学校に行くのか、なんで学ぶのか」ということが子どもたちに伝わるようにしたい。「なぜワクワクが必要なのか？なぜ「なぜ」ということを考えるのか？なぜ学校があるのか？なぜ学ぶのか？」などの根本的なところを大切に、この計画を策定したい。
- 子どもの夏休みに働いている保護者は学童に子どもを預けている方もいる。学童ではクーラーの効いた狭い部屋で宿題や勉強をしていることが多いが、もっと効果的な遊び方や過ごし方はないか。省庁の管轄を越えて、学びの連続に着目し、子どもにとって貴重な一日に大人が何をできるか今一度肝に銘じ、私も関わっていきたい。
- アクション5の⑫について。スポーツの機会は、総合型地域スポーツクラブだけではなく、ニーズを反映させた多様な活動の視点も必要。また、スポーツを通じた豊かな心身の育成には、環境や発育・発達に応じた量・質を適切に考える必要。さらに、指導者のハラスメントはまだ根深い問題。子どもの環境・安心を守る視点からも大切な視点。
- 目標の「多様性あふれる」については、多様な人たちが多くいるということだと思うが、例えば、LGBTQ+の方々は、多様性をどう理解しているか。例えば、「多様性に満ちた」、はどうか。多様性を尊重することが多様な人を尊重することになると考える。

【石沢委員】

- 学生と一緒に7トークに参加。学生一人ひとりが学校生活や学業に対し、様々な感じ、考えていることを理解。「様々な世代の人と関わることで自分自身の成長につながり、社会に接続していくことに直接的に影響を受けた」という声が印象的。体験や自分の思いを言語化し他者に伝える経験ができたという学生の声も重要。
- 7トークのように、計画の骨子を入り口にして語らう場や機会を作っていくこと、持っている思いを言語化し形にしていくことができるコンスタントな機会の設定、様々な世代の人たちと教育について語り合う機会の重要性を改めて感じた。

- 県民みんなでチャレンジの部分はシンプルにわかりやすくなった。何を大事にしたいのかが、とてもわかりやすい。
- 子ども達を中心にした視点で書かれているが、骨子案の2ページ目で、家庭の役割や地域の大人の役割が、「子どものため」となっている印象。地域の大人も送り出すだけではなく、子どもたちと関わりながら学び、一緒にチャレンジしていく、生涯学習とつながるような内容があるとよい。
- DXや体験、学力も含め、なぜ大事か、必要かという目指す先やゴール、どう活かすかという部分も入ると全てのチャレンジがリンクするのではないか。
- 個人のウェルビーイングが達成されたという質的な部分を、どのような軸でどうやって見ていくのか。特に芸術活動などは個人の内面の変化が重要。子どもや先生達の中でワクワクが生まれてきたのかなどの軸になる見方や具体例も委員の中で考えていけるとよい。

【佐藤委員】

- 子どもや大学生なども含め、様々な立場からの様々な意見を取り込んだ骨子案になっていると感じる。
- 家庭、保護者、県民の皆様へのメッセージもあり、6教振と比べて、県民全体で子どもたちを育てていこうというメッセージ性や、県民全体の子ども応援アクションプラン、チーム山形県民というニュアンスが伝わる。
- チャレンジ3の「尊重」について、みんなが主役で応援団や多様性の尊重という中で、家庭の部分の「子どもの生活習慣を整える」が入っているが、4つのチャレンジには入りづらいのでは。
- 確かな学力は、知識や技能に加え、学ぶ意欲や課題発見、主体的な判断、行動、問題解決能力などを含む概念だと思うが、探究のところで十分にカバーされている。基礎学力をある程度身につけた上で、応用として探究がある。
- 山形の小学6年生はゲーム・スマホの従事時間が長く、平日3～4時間以上の割合が多いとのこと。勤勉性は児童期に身につける能力・資質。やることをきちんとやる力、やりたいことを我慢する力、やりたくないことを今やる力などを「尊重」入れ込んではどうか。
- チャレンジ4の「協働」だけ、家庭と地域の大人が一緒なので、家庭の手伝いや家族の行事、地域の活動への子どもたちの参加の側面的支援等、家庭を独立させてはどうか。

【澤邊委員】

- 今後も細かい修正はあるだろうが、計画としてある程度出来上がってきたものと考えている。今後問われるのは、計画をどのようにして運用していくか。
- 県民の皆様へのメッセージ内「地域、企業・NPOの皆様へ」について、子どもがいない方など自分の時代のイメージからアップデートされず、画一的な学びから個別最適な学びへの変化を認識するのはなかなか難しい。対話す

る機会や学校教育を知る機会が重要。

- チャレンジ3の「尊重」で、「学校内外の様々な人と交流し」とあり、交流という点、どうしても外に目が向くことが多いが、学校内にも様々な人たちがいるので学校の中も非常に大切。
- 誰一人取りのこさないということで、様々な場所が提案・提供されることも大事だが、多様な人たちが同じ場で、単に一緒にいるだけでなく、色々話せる等本当の意味で同じ場にいるという「インクルーシブ」は非常に重要。

【末永委員】

- 村山市で開催された7トークでは、高校生から70代まで参加しており、多世代の考え方や意見に触れる機会となった。こうした多世代で話し合いを行う機会の重要性を感じたところ。
- 7トークのような機会には、積極性の高い学生が参加すると思うが、意見・考えを持ちながらも、なかなか行動を起こせない学生も参加できる仕掛けがあるとよい。
- 「県民みんなでチャレンジ」について、「子どもたち」、「家庭」、「地域の大人」と主語が決まったことで、社会の様々な方が教育への関わり方を想像できるようになった。
- 「施策パッケージ」について、パッケージという語感がいい。パッケージにすることで、子ども、家庭、地域への一体的な施策の必要性を感じられる。
- 各チャレンジで、地域の大人が子どもたちへ提供するだけでなく、提供することで自分たちの学びにも繋がるという双方向の表現になるとよい。
- VUCAの時代と言われ、常に変化する中において施策の結果を計画にフィードバックしていく機能が必要。計画の進行管理や見直しを行う運用チームの検討が必要。

【高井委員】

- 7トークに参加。保護者から、学校の情報が一方的、学校側とコミュニケーションが必要、先生と話す機会が少ない、スクールカウンセラー等の相談機能を知らない、相談するハードルが高い、といった話があった。保護者と学校・教育機関のコミュニケーションのハードルを下げるのが重要。
- 教育は学校単体で行われるものという意識が強く、企業や地域が教育に関わるという認識がなかったという話もあった。保護者が、自分自身も教育に携わっているという認識を持てる風土作りが重要。
- チャレンジについて、「地域」は教育に関わりやすいが、「企業」がどういう形で教育に関わるか、子どもたちにどんな影響を与えられるかを考える必要。
- 弊社では、中高生の工場見学を受け入れているが、年に1回のイベントになりがち。企業は体験・見学機会の提供が多いが、業種の偏りも感じる。生活の中であまり意識していない業種についても学ぶ機会があるとよい。経営者だ

けでなく、様々な職種の話聞く機会があるとよい。

- 5～6人のグループで会社にインタビューし発表することを年3回も行えば、様々な仕事に触れ、山形県を創っている実感があるのではないか。また、郷土愛の醸成が進み、子どもたちが様々な選択を考える機会になる。
- この計画を県民が認知し、実行に移すための様々な仕掛けが必要。

【玉井委員】

- 300万人の長期滞在外国人がいる社会で、多文化共生は必然。山形の子どもたちがICT等を活用し様々な形で外国と交流することで、一人ひとりの可能性を開いていくことが大切。
- 大学のノウハウを活用することで児童生徒への刺激を与えられる。

【寺脇委員】

- 「ウェルビーイング」の内容を振り返ってみると、古くて新しいことが述べられている。「ウェルビーイング」は、今までもあった概念だ。これまでは、どちらかといえば、世界や人類のウェルビーイングに焦点があったが、それに加え、これからは個人の満足や個人のウェルビーイングをより意識する必要がある。
- ウェルビーイングには、子ども、教員、保護者、企業の経営者等、それぞれのウェルビーイングがある。個人のウェルビーイングを目指すには、それぞれが主体的に追求していく必要。
- 施策パッケージをベースにおき、子どもたち、家庭、地域の大人を並列にまとめると、それぞれがウェルビーイングを目指すために何をすればいいのか、県民に伝わりやすいのではないか。
- チャレンジ3の「尊重」について、自己実現・自己決定の要素が弱い印象。この要素をもう少し加えることで、自分事と捉えやすくなるのではないか。

【内藤委員】

- 県民みんなでチャレンジについて、これまでの話をまとめて丁寧に作り、いろいろと盛り込んで頂いたという印象がある。
- 内容が県民に届かなければ意味がない。施策を作って、反応をみながら施策を修正していくという、今後の運用の方が重要。
- 言葉もわかりやすくなり、パッケージという表現もいい。計画自体、走り出してから成長していくのではないかとワクワク感を感じている。
- チャレンジ3の「尊重」について、尊重と聞くと、誰かを尊重する、自分を尊重する、など、人によって捉え方や受ける印象が異なるのではないか。
- チャレンジ部分に、コミュニケーションという言葉がいくつかあるが、この他に、誰かを傷つけない、悪いことをやってはいけない、こういうことをしたら危ないといった、人としての基本的なことを盛り込んでもいい。対面で

のコミュニケーションが減り、SNS上で言葉や活字がやりとりされ、相手の顔色も分からない社会の中で、山形県がどこよりも先にこの点に力を入れ、取り組んでほしいと思う。

- 7トークに弊社の社員2名が参加したが、幅広い世代が集まって対面で話し合いができた、貴重な体験だったと話していた。このような場を設定いただいたことを有難く思う。

【中西委員】

- 社員とともにオンライン7トークに参加。子どもが主役ではあるが、大人も一緒に、様々なチャレンジをした子どもの受け皿となり、多様な価値観を受け入れられるよう、考え方や技術的な面をブラッシュアップしていく必要。
- 7トークの地域の方の話で、学校教育では知識だけではなく、自分のワクワクを見つける体験をさせてあげたい、複雑化する家庭環境の問題など、子どもの力だけでは解決が難しい部分に対するサポートが必要という話が印象的。
- 4つのチャレンジ部分については、見せ方や例に工夫が必要。例えば、チャレンジ1の「ワクワク無限大」は、もっと広げて、体験だったらどんなものでもいいという形はどうか。体験の内容を絞らず大きな視点の書き方でもよい。

【藤川委員】

- 中学校の校長の皆さんに7教振について話す機会があったが、ウェルビーイングって何？というところから始まった。ウェルビーイングについて、自分と地域と社会が豊かである状態を目指すといった認識の共有が必要
- 四象限の真ん中に、「DXはみんなの友達」とあるが、ここにあるが故に注目できなかった印象。
- チャレンジ2の「『なんで？』を大切に」の部分について、探究学習に寄っている印象。そもそもこんな決まり何だっけ？こんなスタイル何だっけ？など、これから不確実な世界を生きる上で問い続けることが大事。未知の世界への対応について自分で考えていくことをここに盛り込みたい。
- チャレンジ3の「みんなが主役で応援団」について、自分の人生の物語を主人公的に生きるという話をしたが、不登校児童生徒の増加は当たり前であり、公教育が変わらないといけない。学校に行かない選択に対して、長い目で見ればいい物語だというような、セーフティネット的な要素が必要。
- 評価軸、どういう景色が見られたらいいのかが、わかりやすい形であるとよい。子どもから大人まで周知し、みんなで計画を語り合ってもらえるぐらい認知してもらうことは、策定と同じぐらい時間がかかる大事な戦略。
- この委員でどこまで議論するか。具体の施策は行政として必要な部分だが、県民に伝えるために大事なこともあり、委員だからこそできることに目を向けたい。
- 周知・認知のための戦略チームの立ち上げを提案したい。計画策定と同時進

行で進めたい。計画策定が終わってから戦略を考えるのでは、せっかくいいものが遅れて世に出ることになる。アウトプットしたものをみんなで会話して、話し合っていくことが大事。7教振で大事にしたいことを皆さんに伝え、広めていくようなことができたらいいいと思っている。

【三浦委員長】

- 教育振興計画に県民みんなでチャレンジするという事は、どういう形であれ県民それぞれに教育に関わってほしいということ。そして、それぞれ自分が受けるべき教育があるのではないかとということ。
- 村山で開催された7トークで、70代の方、20代の末永委員、10代の高校生と一緒に話をする場面があった。70代が教える側、10代の高校生たちが教えられる側という発想になりがちだが、今回の「県民みんなでチャレンジ」には、その考え方の枠組みを崩したいという思いがある。10代が70代の経験に学ぶことは必要だが、それと同じように70代が10代の高校生から何を学べるのか、そんな発想ができる計画にしていきたい。
- 子どもの教育が一番の柱にはなるが、子どもが地域に出ているいろんなことを教えてもらうだけの授業では魅力的でないことは、教員がすでに感じていると思う。地域の方が、地域との関わりとして子どもから学んだという実感が持てるものにしたい。そういったことを2枚目の言葉の中に盛り込んでいけないか。
- 本県教員の初任者研修資料の中にある「学び続ける教師」という言葉が、今、生きてくる。「学び続ける教師」は「学び続ける県民」となり、それぞれが学びの対象、場所、やり方を選びながら、学べるようにしていきたい。

【矢野委員】

- 全体として、非常にわかりやすくまとまっている。
- 4つのチャレンジについては、端的な表現で提示し、それぞれについて、子どもたち・家庭や地域の大人ごとの概念、例、そして施策パッケージという3つのセットで表現している点がわかりやすい。
- 県民みんなでチャレンジということだとすれば、子どもが主語だとしても、親も挑戦して、ワクワク体験をして背中を見せるということも重要。親や大人もチャレンジする要素があるともっとよい。

【山川教育委員】

- これまでの議論を踏まえ、表現として非常にわかりやすくなり、関連性も分かる。全体としてはこの内容でよい。
- 学校教育の現場が最も重要で、基本的な場。子どもたちへのところで、先生方は直接出てきていないが、教職員がいろんな面に関わるし、アクションの中身は教職員のこと。様々な課題がある中で、学校の先生方にこの7教振の中身、

基本的な考え方をしっかり認識してもらい、現在ある課題に向き合っていくことが非常に重要。周知認知、実効性という点で、まずは先生方にきちんと認識してもらいたい。

【小関教育委員】

- なぜ学校に行かなければならないのかという根本的な問いの答えが導入部にあるといい。個人的には、多様な価値観の人たちと出会い、学校に行かないと出会わない人たちに出会う機会があるからだと思う。自分が好きな人ばかりではなくて、苦手な人とも出会わなければいけないというのは1つの勉強になる。
- 運動能力と学力の相関関係について、アメリカでの研究によれば、運動能力が高い方が、算数・数学の成績が良いというデータが得られたとのこと。勉強と運動の両方をするのは否定されることもあるが、アクション5に、スポーツをすることが学力の向上にもつながるということを触れられないか。

【和田教育委員】

- 骨子案について、様々な意見を反映し、テーマごとに内容の濃いものが出来上がっている。県民みんなでチャレンジのポイントについても、子どもたち、保護者、地域の方々、それぞれの立場で行動する上で大きな指標となるだろう。
- ただ、委員、教育委員の熱い意見を網羅して反映しているが故に内容が多岐に渡っている印象を受ける。これがどのような形で県民の皆様へ周知されるかにもよるが、県民全てのウェルビーイングを目指すには、それぞれ全体に目を通していただいて、それぞれの立場で、ヒントを見つけてもらえればいいのか。今後、県民の皆様への提示の仕方が非常に重要になってくる。
- 前回の会議でも申し上げたが、地域にどれくらいの協力企業があるかを確認、認識するためには、協力企業をリストアップし、協力企業バンクのようなものを作る必要がある。そうした取組みが、地元企業への就職、地元への定住にもつながるだろう。

【丹治教育委員】

- 「県民みんなでチャレンジ」の内容を見ると、一緒にみんなというよりも、子どもに対して何かをしてあげる、提供するというように上からの印象を受けた。一緒に楽しむ、学ぶ、チャレンジするということが大事。
- 子どもが一番近くにいる大人である親が、一緒に育っていくことも大事。親として親のことを学べる環境、親を導きフォローしていける環境があるとよい。
- 企業、コミセン、公民館は、地域の中心として担うべき役割を見直すことが大事。人々を取り巻く様々な環境が変わってきており、今まで通りが通用しなくなってきているので、今までとは全く違うことをしていかなければなら

いし、意識を変える必要がある。

- チャレンジ3「尊重」について、自分を大切にする・される、だから他の人も大切にするという文言があってもよい。
- チャレンジ4「協働」について、子どもも大人も互いに協力して、お互いの良さや得意分野を最大限に活かせるようになればよい。
- チャレンジ1「体験」について、私は遊びをイメージしていた。子どもが子どもらしくいられる体験、時間が大事。体験した子ども自身が誰かにそのことを話したくて仕方がなくなるような体験をさせてあげたい。そうした体験や気持ちが、探究に繋がったり、人に優しくしたり、全てに繋がっていくと思う。